

さあ、輝かしい舞台の幕開けだ。

そんなことを言って私に振り向いた。

彼は何も知らないで生きているから、私としても難しいのです。

彼と付き合うことはとても楽しいが難しい。

難しいことを押し付けた両親を恨むわけではないが。

「でも、なんの舞台？」

それは決まっているだろう？

いや決まっていますよと返しても意味がない。

「僕と君の新しい人生だということに」

彼はよく私に笑いかけてきた。それだけでも嬉しいが、ここにいない必要はない。

私の部屋で一緒におまじないをよくやった。何の意味も持たないおまじないに彼は嬉しそうだった。

とある日の私の言葉を受け継いだ。彼は部屋を青く染めた。プラネタリウムを回して宇宙があると言った。

何が言いたいの？と言葉には出さず見た。彼は傍にあるアルバムを抱えていた。大事そうに見ている、空を映していた写真が綺麗だ。

「どうしたの？」

私は気付いているのかもしれない。彼は気付いていないのかもしれない。でも、これだけは言いたい。

「私は、あなたの、全てなのかしら」

そりやそうだろ、とはにかむ彼はまた笑った。

「だって、遂に別れるんだから」

新しい人生とか言い出したから驚いた。でも、そのアルバムだけを抱えて私にキスをした。

「今までありがとう」

そして私の部屋から泣きながら出て行った。もちろん、鍵は返された。

「私も、勇気を出さないとね」

この部屋にあった彼との思い出はもう辛さしかない。

「だから、あなたを忘れよう」

一緒に過ごした部屋を売り払おう。

そんな日常が詰まった部屋を。

もう、いらないんだから――。

私は思う。

この舞台はよく廻ってくれた。

だから、最後に役者を演じる。

それは。

「あなたが演じた過去を思い出にするだけだから」

アルバムを持っていった理由はよくわからなかったけど。

でも、これだけは言える。

「私は私の人生にあなたを選んで良かったわ」

そして、ちよつとだけ泣いて、スマホで不動産屋を調べた。

はい、カットオ！

「お疲れです！ 今のシーンはなかなか迫真でしたねえ」

「彼氏役さん。彼女泣いてますよ？」

泣くのとて難しいな、でも、そんな舞台が本当にあつたら嫌だよ。

だって劇場なんだもの、ここ。